

良心学の展開

—— グローバル時代の良心の探求 ——

1

Overview

1. 良心学研究センター
2. リーディング・アサインメント
3. 「良心」概念の系譜
4. 良心学の展開
5. 良心学の方法論
6. 学際研究としての良心学

2

1

良心学研究センター

3

良心学研究センター（2015年4月1日設立）

<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>



4

良心を世界に

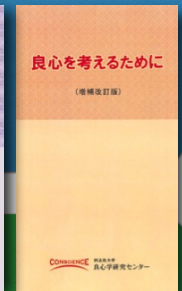
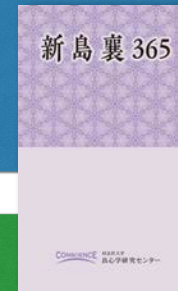
「一国の良心とも謂うべき人々を養成せんと欲す。」（設立の旨意）

良心を覚醒させる知の連携と知の実践

「良心の全身に充満したる丈夫の起り来たらん事を」（良心碑）

5

【研究】



【教育】

「良心学—グローバル時代における良心の探求」（小原 克博）
「良心学—良心を実践する」「良心学—こころと創造性」（八木 匡）
「良心学—良心を科学する」（林田 明）

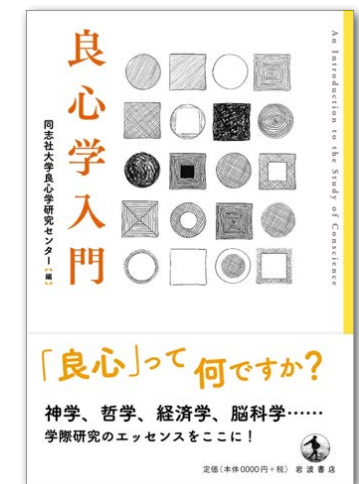
6

2

リーディング・アサインメント

7

- ・ 総 説
- ・ 第1章 キリスト教と良心
- ・ 第2章 イスラームと良心
- ・ 第3章 哲学と良心



8

第1章 キリスト教と良心

- ・ 隣人愛の実践——「他者」への越境的関係
- ・ 良心と「個」の確立——転換期としての宗教改革

9

第2章 イスラームと良心

- ・ 「神と共にある」ことに由来する良心
- ・ イスラームと暴力
- ・ 世俗主義

10

第3章 哲学と良心

- ・ 『孟子』に由来する良心——万人にある、涵養すべき道徳的基礎
- ・ 人間は利己的か、利他的か——進化論
- ・ 法廷としての良心——良心の呵責
- ・ 「公平な観察者」としての良心

11

3

「良心」概念の系譜

12

西洋における「良心」

- conscience ← conscientia (コンスキエンティア、ラテン語)
= con (共に) + scire (知る)
- その元になるのは συνείδησις (シュネイデーシス、ギリシア語)
= συν (共に) + εἶδω (知る、考える)
- (参考) ドイツ語 Gewissen = ge (共に) + wissen (知る)

13

誰と「共に知る」のか？

- 自己の内面的な対話 (内なる他者との対話) 【個人的良心】
- 他者と「共に知る」 【社会的良心】
- 神と「共に知る」 【信仰的良心】

14

日本における「良心」

- conscience の訳語として「良心」が最初に用いられたのは、ブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』(1863年)において。『孟子』から取られた。(『角川新字源』)
- 孟子は性善説を唱えた。日本語の「良心」も、こうした儒教思想の影響を受けている。
- 福沢諭吉は『学問のすすめ』(1872-76年)の中で conscience を「至誠の本心」と訳した。
- 「良心」の思想史的広がりを見極めるためには、「良」を一度取り除き、「共に知る」に起因する緊張関係を理解すべき。



15

現代における「良心」

- 自分自身を深く振り返り、「個」の強度を高める「良心」
(内に向かう良心、個人的良心)
- 共同感覚としての「良心」 (外に向かう良心、社会的良心)
- 国家主導の「道德教育」と一線を画する「良心教育」
(良心の越境的・対話的次元)
- 地域・世代を超えた「共に知る」ことの実践 (良心の共同体)

16

4

良心学の展開

17

・「統合知」としての良心

- ・ 「良心」に隣接する諸概念（道徳、倫理、意識、認知能力、共感、利他性、対話など）を用いながら、幅広く人間の精神と行動を研究する。
- ・ 「共に知る」ことを原義とする良心の現代的機能は、細分化した多様な学問領域を「接着剤」のようにつなぎ合わせる「統合知」。

・「実践知」としての良心

- ・ 新たな価値を広げ、社会に影響を与えていくためには、コミュニケーション能力やリーダーシップといった「実践知」が必要。

18

4-1

「統合知」としての良心

19

大学および学問の歴史

- ・ ユニヴァーシティ（←universitas）の誕生（12世紀のヨーロッパ）
- ・ 上級学部：有用な学（神学・法学・医学）
- ・ 自由学芸学部（Faculty of Liberal Arts）：リベラルアーツ（自由7科：文法学・修辞学・論理学・代数学・幾何学・天文学・音楽）

【参考文献】 吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書、2011年

20

リベラルアーツの復活

- ・なぜ長らく失われていたリベラルアーツが復活したのか？
- ・キリスト教世界における知の伝統と、イスラーム世界経由で再流入した古代ギリシアの知が交差し、**宗教性**と**世俗性**が緊張を帯びた出会いをなす。
- ・リベラルアーツは「哲学」（文系・理系を含む）に統合されていく。

21

19世紀のアメリカ

- ・哲学
 - ・自然哲学 (natural philosophy) → 自然科学
 - ・知識哲学 (mental philosophy) → 論理学、心理学
 - ・道徳哲学 (moral philosophy) → 倫理学、政治学、経済学
- ・conscience は興隆する道徳哲学を背景として重視された。
☞ 伊藤彌彦「新島襄と良心——その歴史的背景」、『良心を考えるために』（増補改訂版）第Ⅱ部第一章

22

キリスト教

良心とは？

世俗社会（啓蒙的価値）

23

グローバル時代における問い

- ・西洋における啓蒙的価値（例：人権）は「普遍的」か？
- ・西洋的価値とイスラーム的価値の対立は調停可能か。
- ・多様性、価値の多元化にどのように対応できるのか？
- ・世界は一方的に「世俗化」しているわけではない。

【参考文献】小原克博『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』平凡社新書、2018年



24

4-2

「実践知」としての良心

25

良心を世界に

- ・ 「地の塩」「土の器」として生きる。
- ・ 国策としての「グローバル人材」の育成に対して
- ・ 「良心」の実践者たち：留岡幸助、山室軍平、石井十次、柏木義円ら
 - ☞ 『新島襄365』【11月26日】社会福祉、【1月25日】留岡幸助、【3月15日】【3月22日】山室軍平
- ・ **良心の実践者**となるために必要なビジョンと力



山室軍平



柏木義円

26

5

良心学の方法論

27



28

6

学際研究としての良心学

29

脳科学と良心

- ・ 良心を脳の機能としてとらえることが可能となりつつある。
- ・ 良心の欠落を研究対象とする——サイコパス研究
- ・ 犯罪心理学者ロバート・ヘアによる『診断名サイコパス』（原著名 **Without Conscience**）はその一例。自己中心性、共感の欠落、衝動性、反社会性などの評価尺度を用い、良心の欠落度を評価した上で脳を調べていくことが可能。

30

進化生物学と良心

- ・ 良心や道徳性が脳の高次機能として存在するならば、その機能を担う神経細胞の回路が存在するはず。
- ・ 良心や道徳性を担う神経回路がヒトにあるならば、それに類似の回路が他の動物にも存在するはず。
- ・ この地球上に生きているすべての生物は共通の祖先から生じ環境に適応して多様化してきたと考えられ、それをダーウィンは「進化」と呼んだ。
- ・ 記憶や認知の機能がヒトにだけ備わったものでないように、良心の萌芽となる脳機能（→**利他性**）はヒトと類縁関係にある生物やもっと単純な生物（昆虫など）にも存在する可能性がある。

31

- ・ 「**道徳性**の高さは、特定の一個人やその子どもたちを、同じ部族のメンバーに比べて、ほとんど、あるいはまったく有利にするものではないが、道徳の水準が上がり、そのような性質を備えた人物の数が増えれば、その部族が他の部族に対し非常に有利になるだろうということは忘れてはならない。」（チャールズ・ダーウィン『人間の由来（上）』講談社学術文庫、2016年、213頁 [原著1871年]）
- ・ 「弱者を助けなければならないと私たちが感じるのは、もともとは社会的本能の一部として獲得された**共感**の本能が、先に述べたような道筋によって、より優しく、より広い対象に拡張されてきたことに伴う偶然の結果であろう。」（同、216頁）

32

霊長類学・人類学と良心（道徳性）

- ・ ホモ・サピエンスの集団規模の拡大、移動
- ・ 想像力（認知革命）、共同体のエシックス
→ 宗教の起源
- ・ ビジネスと宗教



33

経済学と良心

- ・ 「人間というものをどれほど利己的とみなすとしても、なおその生まれ持った性質の中には他の人のことを心に懸けずにはいられない何らかの働き（→**共感**：小原による追記）があり、他人の幸福を目にする快さ以外に何も得るものがなくとも、その人たちの幸福を自分にとってなくてはならないと感じさせる。」（アダム・スミス『道徳感情論』日経BP社、2014年、57頁）

34

心理学と良心

- ・ 「何か重大な事柄では、自分の**良心**による是認だけでは心の弱い人間はめったに満足できないものだし、胸中の偉大な住人である想像上の**中立な観察者**の証言も、それだけでは必ずしも心の支えにはならないものだ。それでもこの存在の影響と権威は、どんなときにもきわめて大きい。胸中のこの裁判官に相談するからこそ、私たちは自分に関係のあるものごとを正しい姿で、また正しい大きさで見ることができ、自分の関心と他人の関心とをつねに適切に比較することができる。」（同、310頁）

35

- ・ マインドフルネス瞑想「ある特定の 방법으로自分の体験に対して注意を向けること：意図的に、いまこの瞬間に、**判断することなく**」（J. Kabat-Zinn, *Whenever you go, there you are: Mindfulness meditation in everyday life*, 1994, p.4）
→ アダム・スミス「中立な観察者」、「良心」
- ・ マインドフルネスには、東洋由来のものと西洋由来のものがある。
- ・ 近年、米国のIT企業を中心にマインドフルネス瞑想が広がり、日本にも影響を与えた。

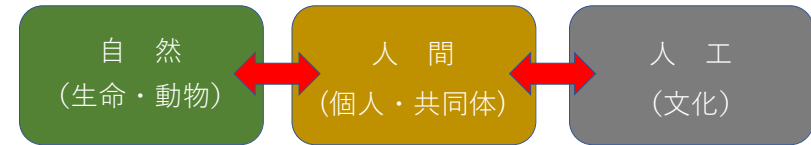
36

良心と人工知能

- ・ 人間（特に現代人）の志向性や価値判断の多くは技術によって媒介されており、人間は純粹な意味で自律的存在あるとは言えない（ピーター=ポール・フェルベーク『技術の道德化——事物の道德性を理解し設計する』法政大学出版局、2015年）。
- ・ AIの社会的実装の拡大は、この傾向に拍車を掛けることになる。
- ・ 人間と人工物（技術）の根源的な相互浸透性を視野に入れることのできる価値規範（**良心の拡張**）が求められる。

37

良心の拡張



- ・ 技術革新によって、自然と人工の区別が曖昧になってきている（自然と人工の非区別化）。たとえば、ヒトゲノム編集、BMI（Brain-machine Interface）、人工知能など。
- ・ 人工物（AI）に良心は必要か？

38